

2025年度大学院修士課程一般入学試験（第I期）問題

研究科名	科目名
文学研究科 国際言語教育専攻	日本語学・日本語教育に関する問題

問題1と問題2の両方に答えなさい。

【問題1】 次のA群から1問、B群から1問をそれぞれ選んで、解答しなさい。

<A群>

1. 規範文法と記述文法の違いについて、現代日本語の具体例を用いて説明しなさい。
2. 現代日本語において行為指示を受ける側の話者に見られる配慮表現について具体例を挙げ、用例を用いて説明しなさい。

<B群>

3. 日本語における行為の恩恵を表す授受表現（～てあげる、～てもらう、～てくれる）について、これらの意味・用法の違いを説明しなさい。そして、それらを教える時に留意すべき点は何か、外国語と比較しながら述べなさい。
4. 日本語の条件節（～と、～ば、～たら、～なら）の4つの形式の意味・用法の違いを説明し、日本語教育における指導のポイントについて述べなさい。

【問題2】 次のA群から2つ、B群から2つの用語をそれぞれ選んで、解説しなさい。

<A群>

1. 清音・濁音
2. 補助動詞
3. ウナギ文
4. 結果残存
5. 柴谷方良

<B群>

6. 臨界期仮説
7. 可変シラバス
8. コミュニカティブ・アプローチ
9. リキャスト
10. クラッシュェン (S. Krashen)

出題意図：

Purpose of Question：

【問題 1】

〈A 群〉

出題意図：日本語教師として求められる基礎的な文法知識を有しているかを確認する。

採点のポイント：1. 現代日本語研究における文法という概念の正確な理解、2. 現代日本語の文型や文法項目に対する構造的な理解と機能的な展開、の 2 点について適切に説明されていること。

〈B 群〉 3, 4

出題意図：日本語の表現とその指導に関する基本的な知識を有しているか確認する。

採点のポイント：1. 各表現の意味・用法、2. 類似した表現間の相違、3. 日本語指導における留意点の 3 点について、適切に説明されていること。

解答または解答例：

Sample Answer(s) or Outline：

【問題 2】

〈A 群〉

1. 清音・濁音 日本語の子音に対する呼称。清音は無声音、濁音は有声音に対応する。日本語固有の音声としては、濁音は語中音に限られていたが、近世以降に「どろ、がけ、ぶた」などの語頭音にも現れるようになった。また、表記の濁点が近世以降に使用されるようになったこととも関連して、濁りや深い印象と結びついた音韻象徴が指摘されている。
2. 補助動詞 日本語において二つの動詞を接合して使用するとき、前項がテ形接続の場合の後項を補助動詞と呼ぶ。具体的には、アスペクトの補助動詞（～てある、～てしまう、～てみる、～ておく、～ていく、～てくる、など）、やりもらいの補助動詞（～てやる、～てあげる、～てくれる、～てもらう、など）、発話・伝達モダリティの補助動詞（～てください、～てもいい、～てはいけない、など）などがある。これらの補助動詞は動詞が文法化(grammaticalize)したものであり、原義が捨象されているため、基本的にひらがなで表記することが通例となっている。
3. ウナギ文 奥津敬一郎（1978）『「ボクハウナギダ」の文法』で示された文法用語。日本語の名詞述語文「AハBダ」においてAとBとの関係が、AとBの同定（僕は田中です）やAのBへの所属（僕は大学生です）などの論理関係ではなく、料理店で客が店員に注文を告げる場面での「僕はウナギだ」のように非論理的な関係を持ち得ることを説明したもの。例えば、「山田先生は職員室です」も一種のウナギ文である。今日においては発話状況に依存した語用論的な現象とされている。
4. 結果残存 動詞テイル形の意味の一つに、動作の継続ではなく、瞬間的動作の結果が残存していることを表す用法がある。これを「動作結果の残存」あるいは単に「結果残存」と呼ぶ。「服を着ている」「眼鏡をかけている」「電気がついている」「窓が開いている」「彼は結婚している」「大学を卒業している」などのテイル形はすべて結果残存に当たる。また、金田一春彦（1950）『国語動詞の一分類』では、テイル形の意味が結果残存となる動詞を「瞬間動詞」と呼ぶとしている。
5. 柴谷方良 神戸大学名誉教授。柴谷方良（1978）『日本語の分析-生成文法の方法』などの著書がある言語学者。柴谷方良（1985）「主語プロトタイプ論」では三上章の「主語廃止論」に反論する形で、日本語のガ格名詞句を主語と呼ぶべき論理的根拠があるとして、ガ格名詞句のみ動詞の尊敬語化を引き起こすことや再帰代名詞の先行詞となることなどを挙げたことが知られている。

〈B 群〉

6. レネバークによる仮説で、言語を習得するには最適な期間（おおよそ思春期までとされるが、研究によって異なる）があり、その期間を過ぎると母語話者のような言語能力を習得することが難しくなるというもの。
7. ある程度シラバスを決めてからコースを開始し、学習の進捗状況やニーズの変化に応じて調整を行ないながら進め、コース終了時に確定するシラバスのこと。
8. 1970年代にヨーロッパで誕生した、伝達能力の養成に重点を置いた外国語教授法の総称。概念シラバス、機能シラバスなどを取り入れ、ニーズ調査・分析に基づいてインフォメーション・ギャップ、ロール・プレイ、タスク活動、プロジェクトワークなどを行なう。
9. 学習者の誤用に対する口頭でのフィードバックのうち、誤りであることを明示的には示さず、正用を返すもの。フォーカス・オン・フォームの一つの方法としても提唱され効果があると言われるが、学習者が気づきにくいという欠点も指摘されている。
10. 1980年代初頭に、5つの仮説からなるモニター・モデルを提唱し、テレルと共にナチュラル・アプローチを開発した。習得—学習仮説やモニター仮説などは現場の語学教師の反発を引き起こしたが、その結果、第二言語習得研究が盛んに行われるようになった。